

## 報告タイトル「2つの『畏』の論点：米中覇権戦争を巡って」

氏名 伊田 昌弘 所属 阪南大学

キーワード：①トゥキディデスの「畏」 ②キンドルバーガーの「畏」  
③ポスト資本主義 ④AI データサイエンス

### 要約 (Abstract)

1. 新型コロナ問題が想定されている業界・機能等に与えたインパクト  
米中による覇権戦争(たとえばワクチン開発と国際準公共財)が益々激しさを増す。米国からの中国企業の締め出し。対抗する中国による中華ブロック経済圏(一带一路)の強化。国際機関で米国の地位低下。技術開発力競争での中国優位。
2. 想定されている多国籍企業の対応方策・取り組み  
米中双方により、2者択一の「踏み絵」が用意されると困惑する企業が世界中で続出する。一方か両方か?そして、それは許容されるのか?自社の社風と整合的か  
コンプライアンスは?また第3国での「もらい事故」の可能性。
3. 今後の展望  
2040年頃に中国が米国を抜いてGDP世界一になると予想されている。次世代規格(たとえばWiFi-6、5Gなど)での中国優位。つまり、覇権交代の可能性高い。資本主義から誕生した多国籍企業ではない国家(国有)多国籍企業の振る舞い方が市場メカニズムを攪乱する。しかし、それは同時にポスト資本主義の予兆でもある。  
ところで、AIデータサイエンスにより、これまでの仕事のうちおよそ50%が無くなるという。新しい職種も誕生するが、労働生産性が向上しているから、無くなる労働量と同じ規模では増えない。つまり「富の偏在と大量失業時代」VS「ポスト資本主義」(労働時間短縮と富の分配)という新しい社会に我々は向かっている。
4. これからの研究テーマ  
AIデータサイエンスの時代には、「管理」(安寧秩序)と「自由」(人権)という相反する2つの価値観が鋭くせめぎ合う。日本はどうなっていくのか?常識的には1945年以降の国際的立ち位置から「米国的価値観」の選択となるが、経済的死活問題(グローバルサプライチェーン、市場規模、輸入産品など)から米中双方へのダブルスタンダードになるかもしれない。さらに、同調性、協調性など日本文化の底流に潜む価値観は中国と親和的なものも多い。効率が良いのはどちらか?効率で割り切れないものとは何か?以上について論じる予定である。